

がんばれ～～っ！日本！！

世界の平和を切に願い、2012年が皆様にとりましてご多幸の年になりますよう
スタッフ一同心よりお祈り申し上げます。

2011年日本は、有史以来の大震災に襲われ、お亡くなりになられた方には衷心より
哀悼の意を表するとともに、被害を受けられた方々に謹んでお見舞い申し上げます。

そんな中、2011年11月24日に早稲田大学の近藤孝弘教授から、また11月25
日に大阪大学の川喜田敦子准教授より御招待を頂き、映画「ソフトレボリューション」の上
映会を開催させて頂き、映画鑑賞後学生さん達と映画の内容について大変興味深いディス
カッションをさせて頂きました。学生さん達が感想文を書いて下さり、ここにその一端を
紹介させて頂きます。

「ドイツやベルリンの分割、分断、そしてベルリンの壁の建設と崩壊については今までに
様々なところで聞き、また学んできたのももちろん知っていました。しかし、今回の映画
を見て、今まで学んできたことは、ベルリンの壁をめぐる一連の流れについてやそれが歴
史の上で持つ意味、歴史に与えた影響など、社会的（歴史的）側面だけだったのではない
かと思いました。ベルリンの壁崩壊については、東ドイツの政治や社会、経済に対する不
満からだと学びましたが、人々がその時に何を考え、またどのように行動していたか私は
ほとんど知りませんでした。又壁の崩壊が冷戦終結の象徴であること、その後東西ドイツ
の格差などが問題となっていることは知っていても、人々がどのような思いでいるのかを
ほとんど知りません。歴史というものの特性上、人々に焦点が当たることが少ないのは仕
方ないことなのかもしれません。しかし歴史を動かしているのは、結局、人々の思いや願
いなのではないかと思えます。今回の映画を観て新ためてそう感じました。もっと歴史の
中での人々（いわゆる民衆にあたるかと思えます。）の動きを知りたいと思いました。ド
イツとその歴史に対する認識が少し変わったように思えます。」

「- - - 映画の中で、人々は幼少期に感じた違和感（東ドイツと西ドイツで家族が分
断されていること、種々の規制がかけられていること）について語っていたけれど、その
話す姿には悲しさが見て取れました。世界史で学んだ時には、現代史の単元の1つとして
覚えただけで、人々がそんな思いをしていたなんて知りませんでした。

前回の授業とこの映画で一番衝撃だったのが、ベルリンの壁が崩壊したことで人々は喜ん

ただだけでなく、不安にもなったということです。"常に崩すべき壁が私達にはあり、それを崩すのには勇気がいる" という女性の言葉は、現代社会を生きる私達も参考にすべきものだと思います。人々へのインタビュー形式であるというシンプルな映画なのに、私達が様々なものを感じるのには、"ベルリンの壁" が現在も残る貧富の格差などの見えない壁の象徴のように見えるからではないでしょうか。」

今回の上映&ディスカッションには、エファ シェーンヘア監督も、ベルリンから日本の学生さん達にDVDを通して熱いメッセージを送りました。彼女の、**一緒に世界の平和のために手を携えて進んで行こうよ！「がんばれ！日本！！」**という暖かい激励が、ご来場の方の心に**じ〜ん**と伝わっていたようです。

2011年12月5日には広島市立大学柿木伸之准教授のもと、上映会を催して頂き、過疎の感想文をよせて頂きました。その中から御紹介させていただきます。

「壁によって家族や友人と強制的に別れて住まなければならない。その精神的な悲しみ、そして同じ国に住んでいるにも関わらず、できてしまったお互いの精神的な壁、どれほど当時の人々が隔てられた空間の中に生活を余儀されたのか、ひしひし伝わってきました。この人達は何もしていないのに、未だ収入に、また心の中に壁があるというのは悲しく思いました。」

「地球に住んでいる以上、私達は変わらないと行けない、それも善い方へ。という言葉が心に残った。変わるということは、同時に何かを捨てることである。その捨てる勇気が出せるかどうか、変わる決意をしたものに与えられる試練だと感じた。」

早稲田大学、大阪大学、広島市立大学の皆様、映画「ソフトレボリューション」の上映にご関心を寄せて頂き、一緒に平和について御考え頂きましたこと、心より御礼申し上げます。貴大学の益々の御発展を、関係者一同ベルリンの空の下、御祈り致しております。